

天人女房・隠岐郡隠岐の島町飯田 令和3年6月22日掲載

収録・解説・酒井 董美<sup>たによし</sup> イラスト・福本 隆男語り手 井上正男さん（明治25年生まれ）  
収録・昭和55年8月12日

## あらすじ

昔。飯田集落に中根という家があった。ここに少し人のいいオジ（独身の弟）がいた。松明をこりに飯田の東谷の畑へ行った。東谷には池があつて娘さんが四、五人水浴をしていたのでオジは一人の着物を盗つてヤマ（畑）へ隠し家へもどつてしまった。

その年の秋になつて、旅の若い女がやつて来て泊まるが雨が続くので、そのまま嫁になつた。

そのうち、子どもができる。子どもも成長したところ、オジは子を負つて畑へ行った。

お母さんが子どもに聞いた。おまえは、ちゃんちゃ（お父さん）に負われてどこへ行く。「神さん拌みに行く。お父さんはその神さんの中らりっぱな着物出して着ての、そいかあ舞つてみる。そしてまた元のところへ片づけてもどつてくるわな」

お父さんが留守のとき、お母さんは子どもを背にそ

こへ出かけたなら、それこそ自分の着物だつた。お母さんはそれを着て、子どもを負つて舞い上がったけれど重いので帯をほどいて子どもを下に降ろした。

お父さんがもどつて来てから、その話を聞いてびっくりしていたけれども、自分が悪かつたのでしかたがなかつたそう。

そして元々貧乏で困つていたところが、子どもが家の門へ出て、空を覗ながら、空へ向つても置かれていくそう。なんと飯田の者はみんなびっくりしてしまつた。

時代が下つて明治六年になつた。前中根でも名字をつけることになつて、この昔話があるので「池添」という姓にした。

ところが、子孫に。知恵の足らない者が生まれるので調べると、天神さんという神さまを粗末にしてはいないかという事になつた。前中根のオジが天の娘さんの着物を祭つていた神さんだそう。しかし、それがどこにあるか今はよく分からなくなつてしまひ、知つている者もない。そこで現在、中根ではスヤ（木製の小さな社）をこしら

え西郷の町の天神さんからお札さんをもらつて納め、それを拌むようになった。それはこの奥の宮さまに祭つてあるわけだ。

それでスツペラポン。

## 解説

「天人女房」の話は各地で聞かれるが、この井上さんの話では池添家の先祖になると語られているところに特徴がある。また、着物を盗られた女がやつて来て泊まるが、翌日から雨が降つて出発できず、そのまま嫁に収まるどころや残された子供が天に向かつて拌むと、俵が授けられる表現なども独特な部分だと思われる。

鳥取県では倉吉市の打吹山命名の元は、「打吹山の天人女」として知られている天人女房の話が伝説化したもので紹介した松江市美保関町の類話では、七夕由来が語られていた。

同じような話であつても、地区が違えばそれぞれ独自の味わいを示しながら、このように伝承されているのである。

（元島根大学法文学部教授）